



日本カトリック海外宣教者を支援する会

巻頭言

『ほほえみ』と『よろこび』

サレジオ会 ポリビア宣教者 倉橋輝信神父

先ずは、個人的なことになりますが、去年は司祭叙階 50 周年と、修道誓願 60 周年を祝う事が出来ました。これもひとえに、慈しみ深い神様、マリア様をはじめ海外宣教者を支援して下さる多くの善意に満ちた方々の、物心両面のご協力のお陰と深く感謝いたしております。

1980 年 2 月 11 日、日本を出発してから 37 年もの月日が流れてしまいました。ポリビアだけでなく、アルゼンチン、パラグアイ、ブラジル、ペルーなどの宣教地で、素晴らしい宣教活動をされている多くの日本人、日系人神父、シスター方に接することができましたことは、大きな喜びでした。けれども、かつては車や電車で司牧活動をされていた神父、シスター方も今はご高齢になられた方も多く、ご苦勞も多いのではと拝察しています。

そして同時に、時代の変化、貧富の格差の増大や、難民移住移民の国外流出などで、経済面や、精神面での助けを必要としている人（外国人）が、私たちの身近にも多くいるのではないのでしょうか？ 1992 年 11 月に『国籍を超えた神の国をめざして』の改定版が、日本カトリック司教協議会社会司教委員会から出版されました。日本を離れ、宣教師として貧しい国に行くことも大切ですが、外国の貧しい国から日本に難民、移住、移動者として来日された人々に

♡♡もくじ♡♡

巻頭言	1
第 66 回運営委員会議事録	2
宣教者からのお便り	3
こんにちは！お久しぶりです！！	9
感謝と賛美	9
海外宣教者のお話を聞く会	12
新入会員・事務局より	16



助けの手を差し伸べる必要性があります。そのとき大切なのは「ほほえみ」と「よろこび」です。

フランシスコ教皇様とマザーテレサの言葉を紹介します。オランダに住む双子で9歳になるハンネスとリデヴァイが、教皇様に次のような質問をしました。「世界をもっと美しくすばらしくするために、残りの人生であと何をしたいですか？」教皇様は手紙で質問に答えて「親愛なるハンネスとリデヴァイ、したいことはたくさんあります。いつもほほえんでいたいです」。

また聖人になられたマザーテレサも、ほほえみの大切さについて次のように語っています。「私達の世界を平和に満ちた世界にするための最初の第一歩、それはほほえむことです。単にほほえむだけで、どれほどたくさんの善をもたらすことができるか、私たちは決して知ることができないでしょう」。

フランシスコ教皇様の喜びについての言葉。「キリストの弟子は情熱的で喜びにあふれる人。どこに行っても喜びを伝えられる人となれるよう努力しなければなりません。神によって満たされた心は、喜びを周囲にも分けることができる喜びにあふれた心です。ちょっとしたユーモアがどんなに役立つことでしょう」。

ユーモアの聖人、トマス・モアの祈りを私は毎日唱えています。お勧めします。「主よ、私にユーモアと冗談を解する恵みをお与えください。人生においてささやかな喜びを見いだし、心から笑うことが出来ますように。それを人に伝えることが出来ますように」

## □■□ 第 66 回運営委員会議事録 □■□

日 時：2017年9月9日（土） 15:00~16:30

場 所：聖ヨゼフ修道院 2階会議室

### 議 事

#### I. 「きずな」140号について

朝日新聞に掲載された「南スーダンの修道院で避難民のために働くシスター下崎優子さん」の記事を、許可を得て「きずな」に転掲した。

#### II. 「きずな」141号について

巻頭言は、ポリビアの倉橋輝信神父にお願いし、すでに原稿は届いている。

#### III. 援助申請の審議

シエラレオネ・ルンサの Sr. 吉田富美子（御聖体の宣教クララ修道会）より、現在の活動地の隣接地域（フリータウン市と郊外）に発生した洪水及び地滑りの大災害に、11,404 ユーロ（¥1,533,040）支援要請があり、緊急を要する援助と判断し、承認された。

#### IV. 「宣教者のお話を聞く会」

9月23日、四谷のニコラ・パレホールで行われるが、Sr. 黒田小夜子（マリアの宣教者

フランシスコ修道会)、Sr.白幡和子(御聖体の宣教クララ修道会)、Sr.末吉美津子(シャルトル聖パウロ修道女会)、Sr.中出敬子(聖心侍女修道会)の4名で座談会形式で行なうことになった。

当日のスケジュール、準備及び運営委員の仕事の分担の確認。

#### V. 運営委員会の委員の退任、新任について

退任委員 井上信一氏  
新任委員 聖心侍女修道会 Sr.日高和子

#### VI. 事務局より

- \* 「きずな」140号の発送は、国内便は9月7日(木)瀬田修道院にてシスターを含む22名のボランティアで3,038通、海外便と大口は9月5日(火)に3名で事務所から発送した。
- \* 10月15日(日)徳田教会でのバザーに、例年通り出店する。
- \* クリスマスカードは、例年の通り12月に発送予定。デザインは11月中に決定。手作り感のあるものが喜ばれるのではないかな。
- \* 8月に突然コピー機が壊れたため、修理見積書と新規購入費を取ったところ大差がなかったため、購入を決めた。
- \* これまで「はがきで領収証」を発行していたが、今後は発行中止とし、領収書の必要な場合は申し出をお願いしたい。

\* 次回の運営委員会 12月9日:15時～ 聖ヨゼフ修道院会議室



## 宣教者からのお便り



インドネシア ◆ジャカルタ◆

### ようやく小学校の校舎が完成

聖心会 井上 千壽代

ゴロモンコック小学校の建物の完成のお便りをさせていただきます。その後、ジャカルタの「アセアン」関係の方々から、さらにご援助をいただき、お手洗いを3ユニットたてることが

できました。いままでは、2つしかなく、どこで用を足していたのか、近くの子供たちは、家に帰っていたのか。しかし、現在300人の生徒に対して、5ユニットできました。でも、水道の設備がないので聞いてみましたら、水は十分でないので、子供たちが水を無駄に使っては困るということで、設置されていませんでした。

おかげさまで、各教室には地球儀が置かれ、いろいろな図面もかけられています。最新のコ



ンピューターも2台お祝いに送られましたが、とりあえず先生方から、活用されているようです。未だインターネットはなかなか、つながらない状態ですが、将来に向けて、という希望を持っておられます。

.....  
◆東ティモール ◆ロスパロマス◆

## 私の任期はあと5か月に

JLMM (信徒宣教者会) 深堀 夢衣

日本の皆様、こんにちは！こちらはだんだん雨が降る時期に入ってきました。去年もその前も雨期がずれたのですが、今年は正しく11月に雨期入りとなりました。「味の素」事業も、私の東ティモール滞在も残りあとわずか。身体に気をつけて頑張ります！

現在、私を含め5人のスタッフで事業を実施しています。味の素事業が始まってから、出稼ぎや学業のために去っていったスタッフもいました。昔から続けている、皮膚病用ハーバル石鹸作り、かまど設置、ココナッツオイルの3つの事業に加え、味の素事業、ローカル化作業、日本からいらして下さるお客さんのアテンドなどなどで、人数が足りなくて正直かなりキツイですが、みんな文句も言わず、協力して仕事

をしてれています。

独立闘争時代を生き抜き、東ティモールが大好きで、ティモールのために何かしたいとAFMETに入ってくれた彼ら。例えばいつかAFMETが無くなってしまふことになったとして、それでも、そんな思いが彼らにあれば、彼らの活動は何かしらのカタチで続いていくんじゃないかと私は思うのです。

通称クミス（インドネシア語で「髭」の意）さんの子どもたちを連れてジャコ島（海がとってもきれいな無人島）に行くこともしばしば。娘のシャンティちゃんは初めて海に行き、大好きになってくれました。



東ティモール滞在も残りあと約5か月。スタッフたちにイライラすることもあります。喧嘩して仲直りして笑い合っ。貴重な時間をくれるティモールの人たちに日々感謝して、残る日々を過ごしていきたいと思ひます。

.....  
◆フィリピン ◆南コタバト州◆

## 修道院で番犬を飼育

御受難修道会 松田 翠

皆様のご親切なご支援のおかげで、この40年近く、深井戸掘りから最近のコピー機購入ま

でご支援いただき、そして最後には新修道院設立のためご尽力いただき、心から感謝しております。また「きずな」を通して、私共よりもっと困難な状況の下で、生活を共にしながら宣教に心身をお捧げくださっている方々の記事を読み、感激したり深い印象を受けています。

今回はこの5月に起きた私共にとっては「大事件」についてお知らせしましょう。静かで安全と考えられていたこの新しい観想修道院にもドロボーが入ったのです。私共の仕事の「ホスチア」の売上金、その他の現金がすっぽり盗まれました。私は丁度その夜、検査のため近くの病院に一晚だけ入院していた時でした。私の部屋に侵入、すみからすみまで荒らされ、現金が盗まれました。不在中で命が救われたのが、不幸中の幸いでした。

ドロボーはどこかで白い布を見つけてシスターに変装して、休んでいたほかのシスターの部屋にも侵入。幸い危害も加えられず、そのあと台所へ行き冷蔵庫の中を荒らしました。また、1人のシスターは手術したお身内の看護でひと月留守にしている間に鍵穴を壊して侵入され、部屋の中を荒らしつくしました。その姉妹を含め私の体験したことはトラウマとなって、とても言葉で表せないくらいで、1週間は別の部屋で寝起きしなければなりません。本当に夢ではなく現実のことだったのです。病院から戻った時は、その部屋の情景を見て涙も出ませんでした。ただドロボーの姿を目にしなかったことだけ、ほっとしています。

それからは厳重な警戒をし、4ヘクタールの敷地に二重の塀の完成のほか、建物の窓すべてにもとあった格子の上に、別のデザインの格子

を張りめぐらせました。そして現在飼っている大きな犬（セパードと雑種）に加え、何匹かの子犬を求め、将来の番犬に育てることに、一同専念することになりました。目下、早朝から番犬の世話やトレーニングにも力を注いでいます。

悲しいことにこちらでは、子供たちが犯罪の手先として道具のように扱われ、時には大人の犯罪目的が果たされたら、殺されることもあります。今回の事件も、客間の鉄格子の窓をのこぎりで切り、その小さい隙間から子供を中に入れて鍵をはずさせ、大人が入るといふ手口が使われたようです。丘のふもとに住む子供たちが利用されたことが明らかになりました。番犬のおかげで、今は元通りの平安で落ち着いた生活に戻っております。

メキシコ ◆チアパス州◆

## 地震直後、そして3週間

ベリスメルセス宣教修道女会 真神シゲ

お見舞いメールありがとうございます。これだけで元気が出ます。深く感謝!!

9月7日木曜日の夜揺れました。11時半ごろ目が覚め、震度3度くらいの揺れと思いました。でも長かった! ゆらゆら、ユラユラ、時計を見ていたら5分以上。揺れが終わったところから、電話がスペインから、ほかの村々から「教会は大丈夫か? 神父、シスターは大丈夫か?」電話が落ち着いてほっと一息、もう金曜の朝5時になっていました。赤く輝く太陽が出ている外に出て驚いた。大きな岩・石・小石・砂が庭の方々に散らばっていて、教会に飛んでいくと天

井が落ちていて、壁に大きな亀裂が何本も入っていました。鐘樓の階段がやられ、聖堂の後ろに続いている高く大きい長い壁の方々が崩れ、亀裂が入っていました。幸いなことに御聖櫃・御像などは倒れていなく無事でした。

さっそく村の役所に連絡を入れました。教会はソヤの遺跡になっています。役所の方が4人やってきて、綿密な点検をしてくださり、教会は立ち入り禁止となりました。雨季真っ最中なので、連夜の雨で地盤が緩んで崩れる危険が大きいということで、村の中央のほとんどがロープで囲まれました。とりあえずミサは、修道院のサロンを使うことにしました。教会の片付けなどが一段落したら、村々を回って損害点検に入ろうと考えている。

チアパスといってもソヤティタンは、震源地オアハカから車で7、8時間も離れた所なので、被害は小さく軽かったようです。ただ、揺れている時間が長かったので、トラウマになった人は多いようでした。今のところ、村の人たちの力で立ち上がることができそうですが、再度の揺れがないことを祈っていただきたいです。

大地震から3週間が過ぎましたが、余震が続いています。先日、プヒルティックのグワダルベ聖堂に行きました。聖堂のわきに大きな鉄製の水がめ(聖堂で使う水の保存)が、大地震で小さな亀裂が入り、雨季で大量の水がたまっていた所に、また連日の雨。余震で亀裂が裂け、どっと水があふれ出て、その勢いで聖堂の窓ガラスが全部割れて飛び散り、聖堂までの階段も流れてしまいました。丘の上に聖堂だけが取り残されていました。急遽、工事を始めましたが、

泥との格闘で2週間、やっと後片付けが終わり、これから水がめ設置、ガラス、階段などの修理に入るところです。

ソヤティタン(以後ソヤと呼ぶ)は16の教区を持っているのですが、そのほとんどが無事でした。ソヤの聖堂がすべての被害を背負ってくれたようです。個人の家は無事で、事欠くことなく生活しています。学校も始まりました。神に感謝です。

今は、被害の大きかったオアハカへの援助活動が始まっています。集まった物品をサンクリストバル(以後サンクリと呼ぶ)にあるカリタスへ運んでいます。被害はソヤより大きく、カテドラルをはじめ20ほどある教会(15、6世紀に建てられた大聖堂)が、すべて立ち入り禁止になっていました。鐘樓、高い塔、階段、壁の一部分などが崩れ、壊れていました。瓦礫の中の教会堂になってしまっていました。ソヤは海拔800メートル、サンクリは1500メートルほどの高さにある都市で、オアハカとは車で5、6時間の所です。

メキシコ市を襲った地震の被害も大きいようでしたが、メルセス会の修道院のあるサンタンデルの方の被害は小さいもので、メルセス会に被害はなし。

地震の片付けのさなかに「きずな」139号を受け取りました。楽しく読ませていただきました。特に巻頭言と、最後の「恐れないひとびと」には大笑いでした。愉快でした。2017年のカレンダーも受け取りました。ありがとうございました。ソヤ村の皆さんにも楽しんでいただいています。日本からのお祈り感謝しております。

世界中災害のない日を願って！



ボリビア ◆サンタクルス◆

## 初聖体と堅信式

サレジャン・シスターズ 漢 那 和 子

10月7日付で「カトリック生活」7, 8, 9月号を受け取りました。いつもありがとうございます。10月はどこの教会でも、初聖体や堅信式が行なわれています。特に堅信式は2年間の勉強を終えた若者たちで、私たちの教会では300人もいます。この若者たちが社会人として、世の光、地の塩として成長してほしいと願っています。ボリビアはとても暑いです。雨が少なくて農家の人はとても困っています。

ドミニカ ◆サンティアゴ◆

## リーダーの養成費に感謝

シヨファイユの幼きイエズス修道会 小 森 雅 子

昨年ご援助いただいたドミニカ共和国の「地区教会の青少年司牧のためのリーダー養成」の報告をさせていただきます。

当初考えていたのは、私の住むサンティアゴの4つの小教区のリーダー養成だけでしたが、他の地区からの要請があり、活動を拡大することになりました。費用も人材も不足しながら毎月4か所ですべてリーダー養成を行うことは、大変な時間と労力を必要としましたが、にも関わらず、ここまで出来たのは皆様のご支援とお祈りの賜物です。ありがとうございました。

現在はこの青年たちが活動の中心になり、新しい地区の青年のための計画を立てています。

青年たちが自分が神様からいただいた召し出しを確認し、自分の可能性と能力を他の人々のために、使うことを学んでいます。また、教会活動への積極的参加、所属するグループへの帰属意識の高まり、家族への協力など目覚ましい変化が見られます。私たちも今年の経験を活かしながら、続けて新しい地区教会の青年たちを援助してゆきたいと思っています。

昨年の援助費の使用報告をさせていただきます。計画書通りにはゆきませんでした。ご了承願います。

シエラレオネ ◆マンゲブーレ◆

## 新しい修道院とルンサの往復です

御聖体の宣教クララ修道会 吉 田 富美子

ルンサから西へ60kmほど、ギニアとの国境まで30kmのところ、Mange Bureh (マンゲブーレ) に私の新しい修道院があります。半田舎の町でしょうか。全体の人口はどのくらいかわかりませんが、カトリック教会は、日曜日のミサには、子供大人合わせて150から200人くらいの参加があります。「キリストの宣教会」のメキシコ人のホセ神父が主任です。小学校が7つ、中高が1つ、幼稚園が1つ。毎週ミサをささげる村が4つ。その他6つの村で、主に子供たちのカテキズムのために、毎日夕方5時から6時半くらいまで、どこかの村を訪問しています。結構忙しくしています。

私のルンサでの仕事は、そのまま続いていますので、ほぼ毎日行き来しています。幸いに道路が良いので40分足らずの道のりですので助

かります。さらに、このミッションには、ソー ーす。問題はインターネット接続だけです。  
ラーの電気があり、ほぼ 24 時間電気がありま こんなところですが、ぼちぼちやっています。

## JLMM の派遣式

2017 年 11 月 11 日に JLMM(日本カトリック信徒宣教者会)の派遣式が行われました。東京・調布市のコングレガシオン・ド・ノートルダム修道会の聖堂で、11 時より諏訪榮治郎司教(高松教区)の司式によるミサの中で執り行われました。二人の修了者のうち洞江有実子さんがこの度、信徒宣教者としてカンボジアに派遣されることになりました。洞江さんは美しい振り袖姿で出席し、司教様はじめ司祭、関係者からの按手に涙を止めることができませんでした。どうか現地で元気に頑張ってくださいたいと、共に心から祈りました。派遣地から「きずな」にもぜひ現地からのレポートやお便りをお送りください。お待ちしております！

事務局記



当「支援する会」の会長であるマタタ神父は、コンゴ民主共和国から来日して 28 年になる。これは長年人々と関わり悩みも聞いてきたマタタ神父が、日本人に贈る「今日一日を心から楽しんで生きる」ためのヒント集である。12 月 19 日幻冬舎から発行。¥1,100

## 徳田教会のバザー

波多野 真理子

秋風が吹き始める十月半ば、徳田教会(東京都練馬区豊玉)では毎年バザーを行なっています。その収益は毎年話し合いで決め、幾つかの福祉を目的とした団体に送っています。

また、ここ数年は同じ敷地内の慈生会ベタニアホームや保育園とも合同で行ない、より多くの方たちが集まる催しとなっています。私もその一角にお店を出し、教会への寄付と同時に、この「支援する会」の資金集めも行なっています。商品は、手作りのホットドッグとお家で眠っていた品々。これを美しく包装し皆さんに気に入っていただけるように仕上げるのが腕の見せ所です。うれしいことに毎年皆さん喜んでくださり、お昼過ぎには品物もあとわずかとなります。

今年は売り子さんに心強い方達に加わってくださり、より賑やかなお店となりました。お一人は今教理を勉強中の方、もう一人はアメリカから日本の高校に交換留学中の方。冷たい雨の中での開催となった今年のバザーでしたが、このお二人の力を借りての明るいお店は中々の人気ぶりとなりました。皆さんに心から感謝！







## 事務局訪問の宣教者

10月24日 ————— シエラレオネ

かとうひより  
加藤陽和さん

(清泉女子大学2年生)



現在ご聖体の宣教クララ修道会が経営する寮に住んで通学。8月にアフリカのシエラ

レオネのマンガブーレ行き、シスター吉田のお世話で同修道会に宿泊。人々が貧しいことは一目で分かったが、日本人と見るや持ち物や学校に通うためのお金を要求するたくましさに面食らった。自分がここで渡すのは簡単だが何の助けにもならないと感じた。子供たちは明るかったが発展途上国のたくましさには驚きだった。行ってすぐマラリアに罹り、お手伝いに行ったのにかえってお世話になってしまった。

10月31日 ————— モンゴル

サレジアン・シスターズ

Sr. 小島華子



首都からバスを2回乗り継いで行く片田舎に住んでいる。

人々はゲルと呼ばれるテント

によやく定住生活を始めたところ。首都に人口の3分の2が集中し、一歩出た田舎ではインフラも整ってなく、人々の生活は大変貧しい。モンゴルは外国人や宗教に厳しく、宣教者として自由に宣教活動ができないことも大変なことのひとつ。また、国外のどんな事業体も1人入国するたびに、5人のモンゴル人を雇用しなければならぬという条件がある。子供たちが努力すれば、将来に希望が持てる教育環境を作りたいと思っている。



## 感謝と賛美！

東京・多摩教会信徒 井上信一

私が「海外宣教者を支援する会」に運営委員として参画させていただいたのは1998年の9月でした。それ以来20年弱の時が過ぎていきます。その間、たくさんの宣教者の方々から嬉しいお便り、時には厳しい、悲しいお便りをいただき、その都度、感謝・感動したり、悲しみを共感したりしてきました。

宣教の現場に到着するまでに、すでに相当な肉体的、精神的苦勞を尽くされている現実も目の当たりにしました。そうして、厳しい風土、政治、社会的な環境の中で福音宣教が続けられている皆様に、頭が下がる思いです。貧しい人々、病に苦しむ人々に寄り添うということは、劣悪な環境で生きることを必然的に要求されるでしょう。そのために、病に倒れ、風土病に罹った方々もおられました。また、宣教、奉仕活動のために遠距離を移動しなければならず、自動車事故に遭遇するリスクは想像以上です。

そのような中で自らの命を捧げ、宣教のために奉仕された方々のことを思い起こして、単に感傷的に悲しむということではなく、イエスのみことばの証人として、感謝と賛美を捧げたいと思いま

す。この皆様こそ、「支援する会」の歴史の中で重みのある宝ものですから。

私の記憶に残っているその宣教者の方々は、本年10月現在次の通りです。この20年間の全員ではないと思いますので、もし記憶に落ちがありましたらお許しください。

- **Sr. 深堀清子**（ナミュール・ノートルダム修道女会）：1999年6月ジンバブエ・ハラレで58歳で帰天。自動車事故で奇跡的に一命を取り留めたが、併発した肺炎とマラリアが致命的となった。9年間の福音宣教の中で、現地の女性の社会的地位を高めるために、女性学習センターを立ち上げ、服飾や料理の面で成果を出し始め、さらに分野を広げようとしていた最中だった。
  - **Fr. 田中 亮**（札幌教区）：2001年3月ブラジル・マリンガ（宣教地）にて64歳で帰天。ミサ後の食事中、心不全で帰天。33年の長きにわたり、教区の貧しい子供たちのために奉仕し、特にザビエル学園の建設と運営に尽くされた。モンセニョールの称号と榮譽市民賞を受けておられた。
- **Sr. 永瀬小夜子**（ショファイユの幼きイエズス修道会）：2002年4月チャドの首都ンジャメナにて奉仕中、68歳で心臓麻痺により帰天。直前まで現地の宣教状況を事務局にこまめに報告されていた。チャドの人々にも慕われて、葬儀には千人に上る信徒たちが祈りを捧げた。
  - **Sr. 高 澄子**（愛徳カルメル修道女会）：2005年6月ブラジル・マリンガで帰天。40年間にわたる宣教活動の中でブラジルを愛し、ブラジルの土に帰ることを望んでおられた。
- **Sr. 遠藤能子**（マリアの宣教者フランシスコ修道会）：2006年12月マダガスカル・アンポヒナリオにて救急車で病院へ運ばれる途中、63歳で帰天。前日から体調が悪かっただけに、アンチラベの病院がもう少し近ければ、助かったと思われる。28年間この地で福音宣教と共に助産婦として、現地の人々のために奉仕を続けられた。現地での葬儀には大司教を初め24人の司祭の共同司式で執り行われ、聖堂はシスターのために祈る人々であふれた。
  - **Fr. 石川裕之**（横浜教区）：2007年7月、一時帰国の後ブラジル・パラ州に戻る途中、乗り継ぎのニューヨークで肺炎から敗血症に罹り、48歳で帰天された。全身、全霊を打ち込んで、宣教と司牧に尽くされていただけに、帰任を待っていたカスタンヤール教区の皆さん、そして出身の横浜教区の人たちの悲しみは大変なものだった。「紺碧の空と真っ赤な大地から」と題する現地報告を「きずな」に寄せられていた。
- **Sr. 二条あかね**（援助修道会）：2009年2月、チャドのンジャメナ郊外で自動車事故のため帰天。チャドに来てまだ1年半、36歳の若さで天に召された。内戦の混乱や50℃に上る暑さという厳しい環境の中での宣教活動はシスターには厳しいものだった。亡くなる1月前、会の姉妹へ次のように書かれていた：「今日のご公現の祝日ですね、皆さんは主にどんなプレゼントを奉げましたか？ 幼子イエスへの私からのプレゼントは、私自身です。私自身—この小さく、貧しい私でも、主の豊かな大地であるチャドで、喜びのうちに生きている私自身を奉げます」。現地での通夜と葬儀には2千人の人たちが参加し、

日本でも聖イグナチオ教会を初め、関係各地の教会で追悼ミサが捧げられた。

- **Sr. アンジェラ高原真知子**（アシジの聖フランシスコ修道女会）：2009年3月サンパウロ病院に入院中、肺血栓のため急逝。ブラジル・サンパウロのジャラグアのカテキスタ会員として長年、日系人の宣教・司牧に尽くされた。奉献生活52年、享年79歳。
- **Fr. 西本 至**（レデンプトール修道会）：2010年8月フィリピンのマニラで急性白血病のため76歳で帰天された。長年のマニラでの司牧、奉仕では物事を楽天的にとらえて、どんな困難にも立ち向かい、多くの人と語り合い、親しまれた。
  - **Sr. 林 静子**（聖霊奉侍布教修道女会）：2011年4月、パラグアイ・イタプアで聖木曜日のミサの準備中に転倒し、重傷のため80キロ先の病院に搬送されたが、その途中で意識を失い、病院に着いて間もなく81歳で帰天された。最後の日まで宣教に尽くされた。パラグアイでの宣教は47年間にわたり、日系人や現地の人々への宣教、司牧と幼稚園の運営に当たり、そのためにパラグアイの国籍も取られた。「きずな」のためにも沢山のお便りをいただき、亡くなる1週間前に書かれたお手紙では、東日本大震災の被害に心を痛められていた。
- **Sr. 梶川千鶴子**（マリアの宣教者フランシスコ修道会）：2012年1月カナダ・オッタワで84年の生涯を終え、帰天。15年前に発作で倒れてから、軽い麻痺のため不自由さがあっても拘わらず、カナダの人々からも慕われて、立派な修道生活を全うされた。
  - **Sr. 深沢幸世**（アシジの聖フランシスコ修道女会）：2012年7月ブラジル・サンパウロで同僚の運転する車でミサ奉仕に行く途中、トラックと正面衝突し、82歳で天に召された。その数日前に霊的姉妹に自分の死後のことについてお願いをされていた。聖書研究と祈りに生涯をかけられていただけに、亡くなる時もロザリオを手にしかり握られていたとのこと。
- **Sr. 高田照子**（聖マリア在俗会）：2012年7月ブラジルのリオ・グランデ・ド・ソル州で自動車事故により帰天された。36年間日本語教育とカテキズムの活動に尽くされた後同州のイヴォチ市の職員も勤めら、その傍らカテキズムの活動を続けられた。
  - **Sr. 嘉 倫子**（ショファイユの幼きイエズス修道会）：2012年8月チャドのギダリで50歳の生涯を終えられた。看護師として長年の願望だったチャドでの宣教が実現し、6月に現地に着かれたが、厳しい自然環境に適應する前に体調を崩され、2か月後の8月に帰天された。勉強を始められていたフランス語で神さまへ「ウィ！メルシー！（はい、ありがとう）」と言われて、息を引き取られたとのこと。
- **Sr. 野田芳子**（タピライのカテキスタ会）：2013年6月、ブラジルのタピライで布教を続けてこられたが、浴室で倒れて意識を失い、88歳で天に召された。同僚姉妹のシスター箕浦と共に58年間一途に日系人を中心に宣教・司牧に尽くされた。
  - **Sr. 酒井カツエ**（カーサ・ナザレ修道会）：2013年8月、ブラジルのスザーノで癌の治療中、転倒して、意識を失い、そのまま80歳で天に召された。46年間にわたり、福音宣教に携わり、その傍ら幼稚園で幼児教育にも尽くされた。沢山の教え子、日系人、

現地の方々が別れを惜しんだ。

最後に、長年宣教地で奉仕活動が続ける中で、病に冒され、帰国した後、亡くなられた方々もおられます。お名前と宣教地を挙げておきます。

- Sr. 尾川晴子（聖心会）：2001年3月帰天、コンゴ・ウガンダ
- Sr. 三宅陽子（ショファイユの幼きイエズス修道会）：2005年1月帰天、チャド
- Fr. 春山勝美（フランシスコ会）：2007年11月帰天、イスラエル
- Fr. 根本昭雄（フランシスコ会）：2008年2月帰天、南アフリカ・ロシア
- Sr. 佐藤浩子（マリア修道会）：2013年2月帰天、カメルーン
- Sr. 根岸美智子（御聖体の宣教クララ修道会）：2013年11月帰天、シエラレオネ

## 海外宣教者のお話を聞く会

9月23日秋分の日の午後、四谷のニコラ・バレホールで、「海外宣教者のお話を聞く会」が開催された。今年は、長年海外で宣教活動をなさった4名のシスターをお迎えして、宣教地での困ったこと、苦心したことや喜び、そして今後の活動について語っていただいた。いずれも感動的なお話で、参加者からは信仰の原点を見せていただいたような気がしたという感想も寄せられた。

### シスターの紹介

Sr. 黒田小夜子：マリアの宣教者フランシスコ会

ブルキナファソで12年間活動。栄養失調児支援センターをゼロから立ち上げた後、パキスタンに派遣され、経営不振の病院を立て直し、今年1月に帰国。

Sr. 白幡 和子：御聖体の宣教クララ修道会

シエラレオネで小学校の教育を通して宣教活動。この2年、膝の手術などで帰国中、間もなく再び現地へ。

Sr. 末吉美津子：シャルトル聖パウロ修道女会

カメルーンのバトゥーリで20年間、森に住むBaka族（ピグミ）の子供の教育と生活改善、農耕指導にも取り組む。

Sr. 中出 敬子：聖心侍女修道会

インドのムンバイで、1976年から40年の長きにわたり知的障害児の教育に携わる。

### ● Sr. 黒田 小夜子

1983年にナース（看護師）としてブルキナファソへ。国立病院では貧しい人々が、全財産をなげうって治療をしても、命を救えない家族を見たことや経験したことが、聖フランシスコ栄養失調児支援

センターを立ち上げるきっかけとなった。まず、栄養失調を改善し体力をつけること、病院に行けない家族でも安く利用できるセンターである。

センターは海外からの多くの支援でスタートしたが、自分たちも収入の道を見出さなくてはならない。やせた土地を開墾してトウモロコシの栽培に取り組み、養鶏をし、牛も飼った。子供たちの父母が力を合わせて働いたので、徐々に自給自足が進み、体制が整ってきた。

そのあと、パキスタンのファイザラバードにある60年の歴史を持つ聖ラファエル病院に派遣された。仕事は10年来赤字の続いている病院を建て直すことだった。あと3年～5年で閉鎖されるといわれている、唯一のカトリックミッションの病院で、周囲は朝晩コーランが流れている環境。ミSSIONナリーもドクターも弱気になっていた。管区長は到着したばかりの私に、プロジェクトの立ち上げを依頼した。聖堂には会の創立者の写真がかけられているが、「シスターサヨコ、できますか？」という声を聞いた。周りを見渡しても誰もいない。「はい！」と答え、ラファエル病院再建の最終責任者として動き出した。

苦勞したことは、赤字経営の状態ではプロジェクトの申請は不可能だと言われ、この病院は貧しい人々と連帯して、自然分娩を推進するというを訴えてようやく受け入れられた。また、前任地はフランス語で今度は英語で、医学に必要なこと、医師やスタッフとのコミュニケーション、プロジェクトの申請など公式文書の作成など、大変だった。

うれしかったことは、やはり病院が3年で赤字から脱出して以前のように活気を取り戻し、成果を確認できたこと。また、支援する会の事務所に「35年の宣教活動を終えて帰国しました」とお電話したところ、飛びつくかのように「長い間本当にご苦勞さまでした！」と喜んでくださったのはとてもうれしかった。

これからは、修道者は事業家ではないので、静かな気持ちで修道の道を歩んでいきたいと思う。

## ● Sr. 白幡和子

大学4年の時、キャンパスでシエラレオネから病気のため帰国したシスターにお会いして、初めて「シエラレオネ」という国名を知った。人々の極めて貧しい生活、学校にも行けない状況を聞く。1965年に入会して、総長につたないスペイン語でシエラレオネ行きを願う手紙を書く。「まず、あなたが模範的な修練女にならなければ」とのこと。7年待つて念願かないようやく現地へ。その間に修道院、教会や学校も出来て整備され、その小学校の教師となる。当時女子の教育は全く行われてなかったので、説得のため家を回わり女子を集めた。

1995年に内戦があり、スペインに退去、そのあとアイルランド、アメリカなどに派遣され、9年間もシエラレオネに帰れる日を待つ。アメリカで知り合った神父様はマリア様への信心の深い方で、3月25日の「お告げの日」に2000回アヴェマリアを唱えると、希望は叶えられると教えて





くれたので実行。4年目に叶い帰国できた。

3年前にロシアの空港で乗り継ぐときに急ぎ過ぎて、膝を痛めてしまった。治療のため日本に戻り、手術、リハビリを受けながら、マリア様に一心に祈った。そしてこの12月、ようやく戻ることになった。

これまで振り返ると、辛かったのはシエラレオネに帰れなくなったことで、喜びは最初の派遣が決まった時、再び帰国が決まった時は本当にうれしいことである。



皆様にご心配いただいた「エボラ出血熱」だが、小中高校はすべて9か月休校となり、人々の移動や集会が出来なかった。修道会ではお米を買い各家庭に配ったが、家の前に置いてくるだけだった。今はすっかり平常の生活に戻っている。

シエラレオネは北海道くらいの面積で、17の修道会があり、お互いに助け合っている。イスラム教との間に困難なことはなく、平穏に生活している。

## ● Sr. 末吉美津子

ピグミ族の子供たち、大人たちの触れ合いを話すとき、たくさんあった困ったことが、すべて大きな喜びに変わっていることに気が付く。それらのことが私の20年間の生活の力にもなっていた。まずは熱帯雨林気候に耐える力を与えてくださいと願ったにもかかわらず、腸チフスにもマラリアにもかかったこと。また、幼児教育に携わるといふ希望を持って行ったが、すぐに生活そのものがミッションであると自覚。特に医療に関して無知であることを思い知らされることも度々あった。



当初、彼らと交流したくて毎日森へ通い続けた。3年を経たある日、入り口に大勢の人が立っていた。ある母親が、あのシスターはこれまで来た人とちょっと違うから、待っていようということになったとか。これが彼らとの交流の始まりであった。

彼らの生活支援でもたくさんのがあつが、ピグミの人々は出生届を出さないの、カメルーンの国民証明書が受けられない。どうしたらいいかみんなで話し合い、お金を出し合ってバスを借りて裁判所まで申請に行ったこともあった。

日常生活で衣服はもらうものと思っている。「クリスマスだから洋服ください」と。自立した生活をしてほしかったので、タダで上げることはできないということを説明し、お金、物、労働などどんな形でもいいからと伝えた。この考え方が徐々に広まった。ある日父親がやってきて、「うちには子供が多いので、シスター何か仕事をください」といったときは本当にうれしかった。



また、彼らは狩猟民族で森から森へ転々として住んでいる。畑を耕す習慣がないので、何とか畑を作りたくて開墾した。関心のある人でグループを作り、まず落花生を作ることに。最初の落花生はシスターが「種」として用意、収穫後に「種」としてシスターに返却という約束でスタート。落花生は3か月で収穫できる。最初の収穫で「種を」返しに夫婦が来た時の喜びは、宣教9年目の忘れられない出来事であった。

これからは、与えられた今の時を大切にして日々過ごしていきたいと思う。

## ● Sr. 中出敬子

昨年の10月に帰国し、長い間離れていたの日本へ順応することに努めている。インドはビザの取得が難しいこともあって、ムンバイの私たちの地区では日本人は一人だった。ビザを待つ間、アイルランドに行き、モンテッソーリ教育を学び、これが役に立った。

インドは人口が約12億と多いので、外国人が来て何かをすることが非常に難しい。例えばハンセン病のためや障害児教育のためならば許可が出る。イエズス会の招待で、ムンバイに1校しかない知的障害児の学校の教師として入国した。2年後に別の学校と、教員養成センターを作り、かなりの教員を養成している。

インドは人種も北部と中部、南部では異なっている。ヒンドゥー教83%、イスラム教11～13%、キリスト教2%である。言語も29州で異なり、子供たちは標準語のヒンドゥー語、準標準語の英語、それに州の言葉を入れて3言語を学ぶ。

困った出来事の一つは、子供たちがスクールバスで帰るとき、12歳のダウン症児が保護者が来ていなかったため、修道院に戻ってきた。一瞬のすきにホールの鍵を開けて脱出して行方不明に。私の命をお捧げしますから助けてくださいと祈りながら、バスを乗り継いであちこち探した。幸いに夕方、自宅から無事に戻ったと連絡が入り、ほっとしたことがあった。

うれしかったことは、私が入院した時、ダウン症児が父親に「シスター、病気」とだけ伝えた。すぐに修道院に電話が入り、がんの手術であることがわかると、その父親は一日食を断って回復を祈ってくれたという。ありがたかった。

何よりもうれしかったことは、マザーテレサがお訪ねくださったこと。マザーの運営する「死を待つ人の家」と「孤児院」を訪問する途中、養護学校にお立ち寄りくださり、子供たち一人ひとりを祝福してくださった。マザーの孤児院からからも1人通学していた。



## クリスマスおめでとうございます。

主は言われました。

「この小さいものの一人にしてくれたのは、私にしてくれたことなのである」と。世界の小さいものたち、彼らに愛をくださった皆さま、愛をもって宣教されている皆さま、主の誕生を喜び合うこの時、そのきずなが一層深まりますよう祈ります。

### 新入会員 (敬称略)

個人会員 10名

田村 葉里子 (埼玉県和光市)

景山 信義 (兵庫県神戸市)

岩田 幸子 (兵庫県芦屋市)

池田 哲也 (山口県宇部市)

立木 梢 (東京都大田区)

小川 幸子 (埼玉県川口市)

野 寄 寧 (東京都世田谷区)

海野 綾子 (神奈川県川崎市)

伊藤 早苗 (東京都多摩市)

小野寺多喜子 (神奈川県川崎市)

### 事務局より

- \*本年度も、国内外で自然災害の多い年でした。被害に遭われた方々の1日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。
- \*今年もクリスマスがやってまいります。海外クリスマス援助要望に応えられますよう皆様の暖かいご支援をお待ちしております。
- \*今年、書き損じハガキや未使用の切手などをお送りくださった方々に感謝致しますと共に、引き続き皆さまからのご提供をお待ちしております。
- \*書籍やカトリック新聞、カトリック雑誌、カレンダーをご寄付くださった皆さまにも御礼申し上げます。
- \*年末年始の事務所のお休みは12月27日～2018年1月4日までです。

発行：日本カトリック海外宣教者を支援する会

会長 M. マタタ

〒106-0032 東京都港区六本木4-2-39

Tel. 03-5770-8753 Fax. 03-5770-8754

e-mail kaigai-senkyo@cronos.ocn.ne.jp URL <http://www.kaigai-senkyo.jp>

・銀行振替口座 みずほ銀行高田馬場支店 普通 2084112

日本カトリック海外宣教者を支援する会

・郵便振替口座 00140-5-67881 海外宣教者を支援する会